日本国際小児保健学会 JICHA

第１０回
日本国際小児保健学会
学術大会

テーマ：地域で取り組む国際小児保健
～国際保健キャリアパスも見据えて～



日時： 2026 年 10 月 31 日（土） 10:00-16:00

会場
青森県立保健大学
A-101 教室／ Web
（ハイブリッド開催）

大会長
高橋謙造
青森県立保健大学
健康科学総合教育部門
教授

公式 HP:
https://jicha.jp/

会頭講演 (11:05-12:05) へのご参加は日本小児科学会専門医更新単位（小児科領域講習 iii）として認定されます（オンライン参加にも対応）。

大会概要

第10回日本国際小児保健学会

テーマ	**地域で取り組む国際小児保健　～国際保健キャリアパスも見据えて～**
日時	2026年10月31日（土）
場所	青森県立保健大学　教育研究A棟　A-101号室/オンライン併催
大会長	高橋謙造（青森県立保健大学 健康科学総合教育部門　教授）
参加費	3,000円(社会人)　※学生は無料です。

会頭講演（11:05–12:05）へのご参加は日本小児科学会専門医更新単位（小児科領域講習iii）として認定されます（オンライン参加にも対応）。

第10回日本国際小児保健学会のご挨拶



このたび、第10回日本国際小児保健学会の大会長を拝命いたしました青森県立保健大学の高橋謙造です。

この学会は、「子ども、健康、国際」をキーワードとして、小児科医を中心に、低・中所得国における国際保健医療協力や小児保健医療に関する研究調査、活動、評価などに関する実践的研究を行っています。2006年1月に日本小児科学会分科会として公認され、国際協力機構（JICA）、WHOやユニセフなどの国際機関、緊急災害人道支援など国際協力の現場経験をもつ会員と共に、在日外国人医療や海外渡航者の予防接種・ケアに従事する開業医や地域病院医師も多く参加しています。

これまでの日本は、国が明確なビジョンを示すことなく、なし崩し的な多国籍化の中にありました。しかし、今は少しずつ状況が変化しつつあります。しかし、この様な状況においてもなお、多言語対応等により最も負担を被るのは、我々、現場の保健医療従事者です。その現場に少しでも裨益する内容を、午前中の基調講演、会頭講演の内容を企画しました。また、後半は、本学術大会の10回目を記念する意図も込めて、教育講演として「リトルベビーハンドブック」の全国展開の経験を、そして、午後には、国際保健に関わりたいが十分な情報がない、と進路に悩む方々への参考とすべく、国際保健経験者たちのキャリアパスについてシンポジウムを設定しました。

本プログラムを通じて、日本から世界へ繋がっていくきっかけを掴んでいただけましたら幸いです。

第10回日本国際小児保健学会
大会長 高橋　謙造
青森県立保健大学
健康科学総合教育部門

プログラム

10:00–10:05　開会の挨拶

第10回大会長　高橋謙造（青森県立保健大学）

10:05–11:05　基調講演

栄養教育と国際保健　～地域で子どもたちの健康を守る

Nutrition Education and Global Health – Protecting Child Health in Communities

吉池信男（青森県立保健大学学長）

座長：高橋謙造（青森県立保健大学）

11:05–12:05　会頭講演

小児医療の現場での国際保健への取り組み

高橋謙造（青森県立保健大学）

座長：足立基（聖マリア病院国際協力診療部）

12:05–13:00　休憩

12:10–12:40　総会

13:00–14:00　教育講演

ピンクブックからリトルベビーハンドブックへ～世界はどんどん拡がっていく～

板東あけみ（国際母子手帳委員会事務局長、リトルベビーサークル全国ネットワーク）

座長：吉松昌司　南京都病院小児科

14:00–16:00　シンポジウム

地域臨床から発展する国際小児保健～臨床からのキャリアパス～

座長：石和田 稔彦　千葉大学真菌医学研究センター

1. **臨床から行政、NGOへ、それでも国際保健はつながっていく**
   足立基：聖マリア病院国際協力診療部
2. **大学病院、徳之島からシンガポールへ：臨床を通じた国際経験**
   元田玲奈：横浜市中部地域療育センター
3. **とにかく一通りやってみた！～臨床研究（ダッカ）、公衆衛生（結核）、実臨床（ホーチミン）、そして帰国（外国ルーツの子ども達との関わり）～**
   吉松昌司：南京都病院小児科
4. **沖縄県立中部病院から中米、アジア、アフリカ：小児科から母子保健そして保健システムへ**
   野田信一郎：国立健康危機管理研究機構　国際医療協力局人材開発部研修課
5. **社会、組織、私**
   窪田祥吾：世界保健機関西太平洋事務局（WHO/WPRO）
6. **総合討論：地域診療からいかに国際保健キャリアにつなげるか？**

16:00　閉会挨拶

足立基：聖マリア病院国際協力診療部（第11回学術集会会頭）

基調講演

栄養教育と国際保健　～地域で子どもたちの健康を守る

Nutrition Education and Global Health – Protecting Child Health in Communities



青森県立保健大学学長

吉池信男

抄録

本講演では、農業、教育、社会福祉、経済等、食を取り巻く課題を含めた幅広い視点から「栄養」を捉えるPublic Nutrition（Beaudry 2005）を基盤に議論する。その最終的な目標は、十分な食料と栄養を得る人権を保障することであり、子どもは最優先されるべき存在である。すべての人が、活動的で健康的な生活に必要な、十分で安全かつ栄養ある食料を、必要なときに入手できるFood Security（FAO 2009）の実現には、特に低所得国で重視される食料供給に加え、「栄養教育」への取り組みも欠かせない。

わが国では、食育基本法（2005）に基づき、就学前および学校での栄養教育が進められてきたが、デジタル社会における新たな課題も生じている。子どもを取り巻く「食環境」を踏まえ、ヘルスリテラシーの観点から新たなアプローチを検討することが求められる。本講演では、わが国の現状を概観し、他国にも応用可能な考え方について解説する。

略歴

吉池　信男（よしいけ　のぶお）　青森県立保健大学学長

1987年～　東京医科歯科大学医学部卒業後、同大学小児科学教室

1991年～　国立健康・栄養研究所研究員、研究企画評価主幹、国際産学連携センター長

2008年～　青森県立保健大学健康科学部栄養学科教授、ヘルスプロモーション戦略研究センター長

2022年～　現職

厚生労働省・農林水産省フードガイド（仮称）検討会座長、厚生労働省乳幼児栄養調査企画・評価研究会座長

第63回日本栄養改善学会学術総会会長、第29回日本健康教育学会学術大会長

会頭講演

小児医療の現場での国際保健への取り組み



青森県立保健大学
健康科学総合教育部門　教授

高橋謙造

抄録

中曽根政権期（1982～87年）以降、日本の外国人受け入れ施策は、労働力不足への対応として、留学生・非熟練労働者、技能実習生、EPAによる介護・看護人材、在留資格の拡充へと段階的に変遷してきた。

しかし中央政府主導で、受け入れ先の地方自治体との議論は不十分であり、筆者が2000年代初期から外国人の母子保健に関わる中で、受け入れた外国人が地域の生活者になるという視点の欠落を感じてきた。

地域で生活をしていく外国人住人は、やがて、当たり前のライフイベントとして妊娠・出産し、子育てもしていく。やがて、次の世代を担う子どもが日本で育つことになる。子育ては親の文化背景に影響を受け、医療現場では、文化や自国での健康観に縛られた受診要望で診療が進みにくく、負担は医療者にも受診者にも及ぶ。日本の医療者も自らの文化を相対化する必要がある。本講演では、小児分野を中心に外国人診療の課題を、実体験から論じる。

略歴

1994年、東京大学医学部医学科卒。

専門は、国際母子保健、感染症政策、国際地域保健。

医学生時代にタイのPrimary Health Careシステムに感銘し、国際保健、公衆衛生を志し、小児科医師となる。離島医療（鹿児島県徳之島）、都市型の小児救急等を経験し、以後、順天堂大学、厚労省国際課、横浜市立大学、帝京大学大学院公衆衛生学研究科教授等を経て、2026年4月より現職。「現場をみて考える、子どもをみて考える」がモットー。

教育講演

ピンクブックから リトルベビーハンドブックへ

～世界はどんどん拡がっていく～



国際母子手帳委員会事務局長
リトルベビーサークル全国ネットワーク

板東あけみ

抄録

1990年のベトナム訪問を機に「ベトナムの子ども達を支援する会」を設立し、以降ベンチェ省で活動。障がいのある子ども達家族との面談の実態見聞を契機に、障がいの予防・早期発見・早期介入に至る道筋を造るために1998年ベンチェ省に母子手帳の導入を提案。当会の資金協力を経て2004年からは現地予算による全村使用となった。これを契機にこの母子手帳の全国展開を考え始め、ベトナム政府機関と関わりながらベトナム最北端のハーザン省で全村展開をし、その後JICAの母子手帳全国展開プロジェクトが導入され4省で実施された。2020年にベトナム保健省は通達を出して全国展開となった。一方日本では、既存の母子手帳は低出生体重児の保護者には使いづらいものとなっており、各地の当事者サークルの要望により母子手帳を補填する冊子として総称リトルベビーハンドブックが作成され，2025年に全都道府県での使用に至った。これらの活動をずっと後方支援してきた。

略歴

京都教育大学特殊教育学科卒業後、京都市内の小学校で29年間勤務、内26年間特別支援学級担任。39歳の初ベトナム訪問後「ベトナムの子ども達を支援する会」を設立して活動。51歳で教師を退職後、大阪大学大学院人間科学研究科に入学し国際協力学を専攻。国際母子手帳委員会事務局長として母子手帳の導入、開発、改訂、母子手帳国際会議開催などに協力。2016年から低出生体重児のご家族への協力開始。2003年ベトナム大統領友好勲章、2025年吉川英治文化賞、2026年保健文化賞を受賞

シンポジウム 1

臨床から行政、NGOへ、それでも国際保健はつながっていく



聖マリア病院国際協力診療部

足立基

抄録

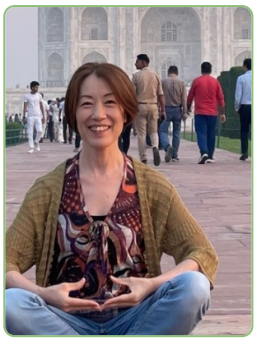
開業医の長男として父の跡を継ぐはずだった半生は、自らの意思というよりも、神の手に導かれた偶然の連鎖であった。3年間の臨床研修を終えた後、三重大学小児科の医局人事により、1996年にタンザニア母子保健プロジェクトへ派遣されたことが、国際保健の世界に入るきっかけとなった。大学院で偶然マラリアを研究したことが、ハーバード公衆衛生大学院の武見フェローにつながり、公衆衛生を学ぶ機会を得た。帰国後は、三重県の遠隔地である紀南地域において、限られた医療資源を再配分するという公衆衛生の原理を、市町村の枠を超えた広域化という形で、大学を通じて実践した。2018年より久留米・聖マリア病院に転じ、小児臨床を続けるかたわら、マラウイ・ラオスにおける子どもの栄養改善、カンボジアでの医療協力、インドネシアでの透析支援など、多彩な国際保健活動に携わっている。途上国で保健医療に携わりながら臨床を続けられたことは、医師としての人生の選択肢を増やしてくれた。これからもこの二つの道は、互いを補い合いながら続いていく。

略歴

1965年	秋田県横手市生まれ
1992年	三重大学卒業
1996年	JICAタンザニア国母子保健プロジェクト
1998年	ハーバード公衆衛生大学院武見フェロー
1999～2000年	JICAタンザニア母子保健プロジェクト短期派遣専門家
2002～2005年	JICAポリオ対策短期専門家
2015年	WHO西太平洋事務局実地疫学専門家（Field Epidemiology Training Program）
2017～2018年	JICAコレラ・HIV腸管免疫とサーベイランス強化プロジェクト（SATREPS）ガーナ長期派遣専門家
2018年～現在	（社）雪の聖母会　聖マリア病院国際診療協力部

シンポジウム 2

大学病院、徳之島からシンガポールへ：臨床を通じた国際経験



横浜市中部地域療育センター

元田玲奈

抄録

物心ついた頃から「子どものお医者さん」になるのが夢で、「『変わっている』と言われるのが最高に嬉しい変わった子」であった。集団に馴染めず、幼稚園は中退。病弱で学校にほとんど行っていなかったので、本人としてはそれほど現実的問題に直面しなかったものの、「建前と本音」とか「和を以て貴しとなす」という文化は、全く馴染まなかった。高校生までは休みがちだったのに、医学部時代は教室の一番前に座って皆勤賞。学生の時から国際医療や基礎研究、離島医療に興味を持ち、医師になってからは、それらの「体験」を「経験」にしていく。ただし、計画的にではなく、「道はオープンにして」。東大病院、徳之島、シンガポール、横浜と、様々な一期一会に導かれ、「空気を読まない」強みを生かして、気づいたらここまで来たように思われる。自分のキャリアパスを語ることが、私を育ててくれた出会いへの恩返しであり、未来への投資となることを願っている。

略歴

東京大学医学部卒業、東京大学大学院医学系研究科修了、医学博士。日本小児科学会認定小児科専門医、日本小児科医会認定「子どもの心」相談医。医師免許取得後、8ヶ月間世界を放浪。東大病院、千葉西総合病院、徳之島徳洲会病院で研修。大学院時代はシンガポールで基礎研究に従事。虎の門病院勤務後、2008年から15年間シンガポールの日系クリニックで小児科・院長兼務。2024年4月から横浜市中部地域療育センター所長。

シンポジウム 3

とにかく一通りやってみた！～臨床研究（ダッカ）、公衆衛生（結核）、実臨床（ホーチミン）、そして帰国（外国ルーツの子ども達との関わり）～



国立病院機構　南京都病院小児科

吉松昌司

抄録

臨床研究、公衆衛生、外来診療について個人的な海外経験を報告する。

1. **臨床研究（2008年～2011年）**
バングラデシュのInternational center for diarrhea disease research, Bangladeshで行った。途上国での臨床研究は医師として貴重な経験となった。

2. **公衆衛生・国際保健プロジェクト（2011年～2015年）**
臨床研究終了後、結核研究所に就職した。国内外の結核関連プロジェクトに関わり、東南アジアやガーナに派遣された。支援地域の医療保健体制の改善が活動の意義であるが、地域住民と関係が築きにくく残念であった。

3. **外来診療（2018年～2020年）**
ベトナム　ホーチミンへ移り、現地富裕層や海外からの旅行者・滞在者の多くが利用するクリニックに勤務した。異国での子どもの病気や子育てに悩むご家族へのサポートがメインであった。親の気持ちを思いつつ、現地の医療状況を頭に入れながら、病児とご家族に対応するように努めた。

4. **海外での活動を振り返って**
上記活動は、帰国後の日常臨床にポジティブな影響を与えている。是非海外での活動にチャレンジして欲しい。

略歴

2000年	筑波大学医学専門学群卒業
2000年	筑波大学附属病院小児科入局、以降、茨城県内の関連病院で研修。
2007年	筑波大学大学院人間総合科学研究科博士課程入学、2012年12月卒業
2011年～2015年	結核予防会結核研究所
2015年～2018年	国立病院機構南京都病院小児科
2018年～2020年	ベトナム、ホーチミン市のクリニック勤務
2020年～2025年	姫路聖マリア病院小児科
2025年～現在	国立病院機構南京都病院小児科

シンポジウム 4

沖縄県立中部病院から中米、アジア、アフリカ：小児科から母子保健そして保健システムへ



国立健康危機管理研究機構
国際医療協力局人材開発部研修課

野田信一郎

抄録

報告者は、学生時代に国際保健医療協力をライフワークにすることを決意した。沖縄県立中部病院の臨床研修と八重山病院での2年間の小児科診療の後、医学部衛生学教室の助手、アメリカでの公衆衛生・熱帯医学の修士課程を経て、国立国際医療センター（現在の国立健康危機管理研究機構）国際医療協力局に移り、以来25年間グローバルヘルスに携わってきた。MDGs時代の中米と東南アジアでの母子保健、SDGs時代の保健システム強化、現在はNCDs対策や医療サービスの質改善にも携わっている。この間、保健課題は国内外の共通性が増し、国際保健はグローバルヘルスとなり、COVID-19パンデミックを前に高所得国の保健システムの脆弱性やワクチン確保におけるエゴなどが露呈し、ODAに対する国益を重視する声が高まるなど、取り巻く環境が次々と変わってきている。この様な中で、地域診療とグローバルヘルスの関わりについて考察する。

略歴

5年間の小児診療の後、医学部衛生学教室の助手、米国での公衆衛生・熱帯医学修士課程を経て、2001年に国立国際医療センター（現在の国立健康危機管理研究機構）国際医療協力局に移り現在に至る。JICA長期専門家としてホンジュラス、ラオス、セネガルに派遣、厚生労働省国際課に1年出向。東日本大震災やダイヤモンドクルーズ船での検疫など国内の健康危機対応にも従事。長崎大学客員教授、社会医学系指導医・専門医。

シンポジウム 5

社会、組織、私



世界保健機関西太平洋事務局（WHO/WPRO）

窪田祥吾

抄録

グローバルヘルスは、従来の枠組みが揺らぎ、次のあり方がまだ定まらない「Liminal Space」にある。この移行期に求められるのは、個人が既存の組織に適応することだけではなく、組織自体も変化し、互いに学びながら新たな役割や関係をつくることである。同様に、キャリアも固定された計画に沿って築かれるものではない。社会の変化、組織の要請、偶然の出会い、自分が大切にしたい価値との相互作用の中で形づくられる。社会、組織、個人が互いに働きかけ、ともに変化する「Co-evolution共進化」の視点から、臨床や地域での経験を国際保健につなげる多様な可能性を考える。

略歴

高校時代にタイで出家生活を経験。米国ウェズリアン大学で仏教人類学を学んだ後、金沢大学医学部に編入学。小児科医として赤十字の人道支援、JICAの母子保健に従事。2016年よりWHOラオス事務所、2023年よりWHO西太平洋地域事務局勤務。現在、People Journey Mappingを通じ、人々の体験を起点とした保健システムデザインを推進している。

謝辞

日本国際小児保健学会第10回大会の開催にあたり、公益財団法人ときわ会様より多大なるご支援を賜りました。ここに記して深く感謝申し上げます。

第10回日本国際小児保健学会学術大会

2026年10月31日（土） 10:00–16:00

青森県立保健大学　A-101教室／オンライン併催

公式HP　https://jicha.jp/